

ジョン・スマイスによる 「信仰者のバプテスマ」理解の一考察

—『野獣の性格 (*The Character of the Beast*)』における
「Actual Faith」の概念から—

金丸英子

はじめに

バプテスト派の祖のひとりジョン・スマイス (John Smyth, 1570-c.1612) は、1609年、それまで関係していた分離派教会と訣別し、オランダ・アムステルダムで同信の者たちと共に信仰者のバプテスマに基づく新しい信仰共同体を作った。スマイスは、自覚的な信仰告白に基づく信仰者のバプテスマが最も聖書的なバプテスマであるとの確信を持ち、これまでの教会の慣習であった幼児洗礼を退けたのである。今日に至るまで、バプテスト教会の間では、幼児洗礼の否定という立場は広く支持されている¹。それは、幼児洗礼の対象者には、バプテスト教会が求める信仰者のバプテスマに不可欠な、自覚的で主体的な信仰告白を求めることができないという理由からである。斉藤剛毅は、スマイスによるラテン語文献『幼児洗礼反対論』を自ら翻訳し、この主張がスマイス自身に遡ることを明らかにしている。それによれば、スマイスはその中で、幼児洗礼反対の17の理由を述べ、幼児にバプテスマを受けるべきでないのは、教理の理解、罪の認識、罪の悔い改めを伴う自覚的な

1 その様子は次のように記録されている。“Pastors and deacons laid down their office, the church disbanded or avowed itself no church, and all stood as private individuals, unbaptized.” (W.T. Whitely, ed., *The Works of John Smyth*, Vol.1., rep. by the Baptist Standard Bearer, 2009, xciii).

信仰をもつことができないという点であったと述べていると言う²。特に、第9番目の反対理由「幼児は主の道に備えることができない」では、スマイスの幼児洗礼反対の立場が収斂されている³。このスマイスの、「主の道に備えることができない」とは、どのようなことを意味しているのか。その反対に、「主の道に備える」とは何を指すのか。本論文では、スマイスのバプテストとしての思想がもっとも明確に述べられている *The Character of the Beast* (1609年) において、自身のバプテスマ理解を展開する際に用いられた「actual faith」という語を手掛かりに、上記の問いが問題とする点を探ることにより、スマイスの「信仰者のバプテスマ」理解について、一考察を試みる。

1. スマイスの分離派批判：

The Character of the Beast におけるクリフトン批判から

すでに述べた通り、バプテストとなったスマイスの代表的な文献は、*The Character of the Beast* (本稿で邦訳タイトルを用いる場合は、斉藤が使用している『野獣の性格』を使用) である。この文献の正式な題は、“*The Character of the Beast or the False Constitution of the Church. Discovered in certain passages betwix Mr. R. Clifton & John Smyth, concerning true Christian baptism of new creatures, or new borne babes in Christ: and false baptism of infants bornr after the flesh*” で、アムステルダムの分離派教会指導者リチャード・クリフトン (Richard Clifton, d.1616) との間に関わされた幼児洗礼をめぐる議論を文字にしたものである。この題からも明らかなように、スマイスは、自らもかつてメンバーであった分離派を厳しく批判しているが、その批判の矢は分離派が温存していた幼児洗礼に向けられている。

スマイスの議論は、次の2つの命題に則って展開されている。まず、「幼児にバプテスマを施すべきではない (The infants are not to be baptized)」, 次

2 斉藤剛毅、『バプテスト教会の起源と問題』(1996年, ヨルダン社), 121頁。

3 上掲書, 122頁。

に「回心した反キリスト者は、バプテスマをもって真実の教会に受け入れられる (The antichristians converted are to be admitted into the true church by baptism)」である。各命題には、3項目の反対の根拠がそれぞれ記されている。「幼児にバプテスマを施すべきでない」では、(1) 新約聖書に幼児が洗礼を受けた例が見当たらず、罪の告白をした者のみがバプテスマを授けられている (マルコ 1・4, 5, 使徒 8・37)。(2) キリストは、人々を教えて弟子とし、バプテスマを授けるようにと命じるが (マタイ 28・19, ヨハネ 4・1), 幼児は教えを理解することを通してキリストの弟子となることができないので、バプテスマは施せない。また、(3) もし幼児にバプテスマを授けるならば、それは「肉による子孫」にバプテスマを授けることになるため、それは洗神行為である (ロマ 9・8) という、以上の理由を挙げている。次に、「回心した反キリスト者は、バプテスマをもって真実の教会に受け入れられる」のは、(1) 教会は、使徒たち (Apostles) のように反キリストを脱した者たちによって構成されるのであり、バプテスマによって使徒的教会の会員となる。(2) 唯一真実のバプテスマはキリストのバプテスマ (baptism of Christ) であるので、すべてキリストのものとされた者たちは、真実のバプテスマを受けなければならない。(3) 偽りの教会は除かれ、真実の教会は建てられなければならないように、偽りのミニストリーや偽りの礼拝は否定されなければならない。以上の各項目をめぐる、スマイスとクリフトンが議論を戦わせている。

クリフトンは、契約に関する旧約・新約の連続性を主張して、創世記 17・10 のアブラハムとその子孫に及ぶ神の契約を根拠に、イスラエルの民の割礼と重ねて分離派の幼児洗礼肯定の立場を擁護した。一方スマイスは、旧約・新約の連続性は否定しないばかりか、福音の下で受け取る契約は、アブラハムの契約と同じものだと述べる。その際、アブラハムの契約に対する理解を一段深めてそれが持つ 2 面性を述べ、クリフトンが主張する「アブラハムの子孫」という血縁 (肉) の契約の他に、アブラハムとその「霊的な子孫 (his spiritual seeds)」に及ぶ契約を指摘する。ここには、スマイスの新・旧約聖書に対する理解が明らかに影を落としている。それによれば、旧約の預言の

完成がイエス・キリストであるので、旧約における契約は新約の契約の予型であった。スマイスにとって、旧約における契約は「血縁」、すなわち「肉」の結びつきによるため「霊」とは相容れないものであるので、契約理解に関しても、新約聖書における霊的な子孫、すなわち「キリストにおいて生まれた新生児 (new born babe in Christ)」に及ぶ契約に優位を置いている⁴。

2. スマイスの「actual」に関する理解

この議論の中で、スマイスは「actual」という語を頻繁に使っている。その一部を紹介すると、アブラハムは神を「actually」に信じることで義と認められたので、その子孫もそれに倣って「actually」信じることで義とされる (He was justified by his actual faith so should all the believers be justified by their actual faith)⁵。マタイ 3・6, 使徒言行録 4・37, 10・47節にあるように、新約聖書のバプテスマは「actual faith」と言葉による悔い改めを求めている (New testament baptism requires actual faith & repentance confessed by the mouth)⁶。約束を「actual」に手にするのは、信仰者の従順による (The actual possession of the promise is by obedience to the faith)⁷。彼ら (幼児) は「actual」な潔さも信仰も持つことができない (they cannot have actual holiness, actual faith)⁸ 等である。

スマイスは、他の論文でもそうであったように、この *The Character of the Beast* においても、そのように重要な意味を持つ「actual」という語について、特にスペースを設けて語彙に関する説明や定義を施していない。「actual」は一般的に、「現実の、事実上の」という意味があり、潜在性、可能性などの蓋然的で不可視的な事柄に対して、行為、事実、現実などの具体的で可視的

4 John Smyth, 'The Character of the Beast', *The Works of John Smyth*, vol.2 (Reprinted by The Baptist Standard Bearer, 2009), 580.

5 Ibid., 582 頁。

6 Ibid., 593 頁。

7 Ibid., 600 頁。

8 Ibid., 603 頁。

な事柄の中に内在するものを指す語として用いられてきた。このような「actual」なものはまた、人間から行為を生み出すもの、人間をして行為に結びつけるものとしても捉えられたので、「actual」を派生させた語「act」には法廷用語としての「決断（結審）」、芸術用語としての「演技、演奏」を指す意味もある。さらに概念的な発展として、本質的に真正であること（real）、明確な境界が備わっていること（definite）とも繋がっていったため、「偽りのない（genuine）」、「本物の、信すべき（authentic）」の同義語とされた。これに関しては、専門家の助けを借りなければならないが、英語の「authentic」は、その語源をギリシャ語の「authentikos」に持ち、「信用できる」、「当てになる（trustworthy）」、「確かな、信頼できる（reliable）」と同義に用いられていることはこのことに関連で興味深い。

The Character of the Beast の中で、スマイスが「actual faith」と述べる際、その前後に「説教された御言葉を聞くことで信仰に辿りついた者」としての「新生（者）」という表現が置かれ、その者たちのことを新約聖書が言うところの「霊的な幼児」とであると述べている⁹。また、クリフトンとの第二番目の議論「The antichristians converted are to be admitted into the true church by baptism」においては、「バプテスマの一回性」からスマイスらの「再洗礼」の無効を論じるクリフトンら分離派に対して、スマイスの主張する「真実のバプテスマ」論が、バプテスマを受ける者に求められる「あるべき状態」を論ずる中で複数の聖書箇所引用を伴いつつ、次のように展開されている。それによれば、まずバプテスマを受けようとする者は、自らの罪を告白した（マタイ3・6）、信じる者でなければならず（使徒8・12, 13）、預言された聖霊を受け（使徒10・46-48）、罪を悔い（使徒2・28）、教えられることを通して弟子となり（マタイ28・19）、新たに生まれたものでなければならぬ（ヨハネ3・3）とし、そのような者たちこそがバプテスマを受けるべきであり（下線筆者）、これらは「きわめてはっきり、かつ固く（または「誠

9 たとえば、‘The spiritual infants of the of the NT, that is, men regenerate baptize.’ (p.585), ‘For by faith (Gal.3.14) we receive [sic.] the promise of faith preached (Gal 3.2) & faith cometh by hearing of the word preached (Rome 10.17).’ (p.600) など。

実に」【most evidently, and faithfully】に求められなければならない」と述べる。その上で、スマイスは、様々な事情のゆえにこれらの要求を満たす可能性をまったく望めない者たちに対して、神はバプテスマを受けることを要求しないとまで述べる¹⁰。ここではその具体的な例として、異教徒、精神疾患を患う者、先天的な知的障害者と並んで、幼児洗礼の対象である生後8日目の新生児が併記されている。このスマイスの文章は発達の有無をバプテスマの条件としたように読めるかもしれないが、強調点はむしろ「神の救いの恵みに対する人間の応答責任 (accountability) の行為としてのバプテスマ」にあったと思われる。スマイスにとって、バプテスマは救いの条件とはならなかった。救いは、信仰者の内面に生まれる「actual」な信仰結びつくものであった。しかし、生後8日目の新生児に代表される応答責任性を備えていない者たちの救いに関しては、スマイスは一貫して「the secret of them to the Lord, who has received secret things to himself」という立場を崩さない¹¹。人間の救いは究極的には神の神秘の中にあり、その大前提を押さえた上での人間の責任応答性を主張したのである。そういう意味では、ジェネラル・バプテストはアルミニウスの神学的立場に影響されて人間の自由意志を尊重し、パティキュラー・バプテストにはカルヴァンの神学的影響がより濃く影を落としているというような、従来の画一的（あるいは、二者択一的）なバプテストの特徴を論じる論じ方は、今後修正を余儀なくされなければならないであろう。

3. 最近の研究から：ポール・S. フィデス (Paul S. Fiddes), *‘Walking Together’: The Place of Covenant Theology in Baptist Life Yesterday and Today* より

最近の研究でこの点に言及した論文のひとつに、オックスフォード大学リージェントパーク・カレッジのポール・S. フィデス (Paul S. Fiddes) によ

10 Ibid., 645 頁。

11 Ibid., 603 頁。

る, 'Walking Together': *The Place of Covenant Theology in Baptist Life Yesterday and Today* がある¹²。フィデスはこの論文で、信仰者のバプテスマと「actual faith」の関係を論じているが、第3節「The Covenant and Salvation」では、スマイスの契約概念を例にとりてバプテスト教会の教会契約概念の論述を試みている。フィデスによれば、17世紀のバプテスト達は、次のような、言わば「2重構造」の契約概念を知っていたと述べる。それによれば、17世紀のバプテストたちは、あらゆる人間の応答の源としての神の恵みに基礎付けられた契約 (unconditional covenant) がまず根底にあり、その上に、人間側の信仰に根拠を持つ可視的な (visible) 応答としての契約 (conditional covenant) が来るとし、それは神と人間との間の契約関係が現実のものとなる (actualize) ためであると理解していたと述べる¹³。フィデスは、前者の「unconditional covenant」の典拠を1679年のジェネラル・バプテストの信仰告白「正統信条 (Orthodox Creed)」に、後者の「conditional covenant」の典拠を、17世紀のバプテスマ・バプテストの指導者であったベンジャミン・キーチ (Benjamin Keach, 1640-1704) の説教集 '*The Display of Glorious Grace, or The Covenant of Peace Opened. In Fourteen Sermons*' (1698年) に求めている。

キーチはこの説教集の第7番目の説教 'Shewing [sic] the Nature of the Proclamation of the Gospel, and the Terms thereof' で、イザヤ書54・10b から「conditional covenant (人間の応答に基づく契約)」について説教している。その中でキーチは、キリストの十字架による罪の贖いは万人に普遍的に及ぶ出来事であるが、それによって神と人との間に造り出された平和は、人間側の悔い改め、回心 (change our own hearts), 新生 (regenerated), 信仰の受領と並ぶ服従 (obedience) が、実際のこととして惹き起こされたが、それはキリストによって人間に注がれた恵みと力に起因していると論じる¹⁴。キー

12 イギリスのバプテスト史家 B. R. White への献呈論文集 *Pilgrim Pathways* (Macon, GA: Mercer University Press, 1996) に収められている。

13 上掲書, 64 頁。

14 Benjamin Keach, *The Display of Glorious Grace, or The Covenant of Peace Opened. In Fourteen Sermons* (London, 1698) by University Microfilms International (Ann Arbor, Michigan), p.160, 163. なお、服従の行為としてのバプテスマに関する議論は、Anthony R. Cross, *Baptism and the Baptists: Theology and Practice in Twentieth-Century Britain* (London: Paternoster Press, 2000) に詳しい。

チの12番目の説教には、そのような人間の応答は、「イエス・キリストを通してもたらされる神の自由な恵みと主権による」出来事であるゆえに¹⁵、信仰もまた、聖霊の実として「呼び起こされた (る)」ものがあると語る。新生という内的で人格的な出来事においては、人間はあくまでも受け身であるとも述べる¹⁶。以上を踏まえて、キーチは最後の14番目の説教で、神と人間の間の「和解」は、相互関係の中で生ずる「共通 (mutual) な」出来事であると結び、そのために罪人たる人間の受け持ち領域 (Sinner's part) とも呼べるものがあると述べる¹⁷。この説教の終わりに向かう部分では、「actual interest in the blessings of this covenant, our actual and personal justification, actual possession, actually possessed」という具合に、「actual」が畳み掛けるように現れる。これらはイエス・キリストの贖いの業に「呼応する (relative)」人間の側からの能動的な動きであり、これをキーチが「actual」との関連で捉えていることは明白である。次の説教部分は、それを暗示して余りあるように思われる。

A sinner hath not, cannot, have actual interest in the Blessings of this Covenant, or have Peace in his own Soul, without Union without Christ, and Faith of the Operation of God first of all, whereby it is, that the Soul is transplanted out of the first Adam, that dead stock into the second Adam that quickening Spirit. . . . Faith also must be somewhat more than an Evidence, the Soul having that in its actual possession, which it had not before. . . . And as while we remain the the first Adam, his fist sin is imputed to us, for not till we are in Christ is his Righteousness to our actual and personal Justification imputed to us¹⁸. (下線筆者)

以上のようなキーチの説教を引用し、フィデスは、神と神が選んだ人間の間にある永遠の決定としての契約は普遍的に存在しているが、それは唯一聖

15 Ibid., p 241.

16 Ibid., p 242.

17 Ibid., p 282.

18 Iibids, pp.284-5.

霊において、人間がイエス・キリストを唯一の愛の対象として選び取ると時に初めて現実のもの (actual) となると述べて、バプテストの教会契約の「conditional」な側面をパーソナルな応答としての信仰者のバプテスマと関連づけて論じている¹⁹。

現在、米国ヴァージニア州のリッチモンド・バプテスト神学校で教鞭をとる教会史家スティーブン・ブラックロー (Stephen Brachlow) もまた、この立場を支持している。著書である *The Communion of Saints: Radical Puritan and Separatist Ecclesiology, 1570-1625* (1988年) で、ピューリタン左派と分離派は共に、自覚的な信仰告白としての「actual」で可視的な信仰とそれに基づく「目に見える教会 (visible church) と、あるべき教会員としての信仰生活 (churchmanship) の必要を主張し、これが後年、分離派から分かれて誕生したバプテストのバプテスマ論理となったと述べている²⁰。それに続けて、バプテストはピューリタン左派や分離派と同様に、「conditional」な教会契約と可視的な服従の重要性を強調したとも述べる。分離派とスマイスの関係にも言及し、スマイスがこの理論を曲げることなく貫徹しようとして結果、分離派と関係のあった者の中で最も早く分離派が許容していた幼児洗礼に異議を唱え、その慣習を退けたと述べる。ブラックローは、スマイスの *The Character of the Beast* から、“Infants are not to be esteemed actually under the possession of the New Testament, which New Testament is visible in the visible ordinances.” を引用し、幼児洗礼に対するスマイスの懸念は、幼児が神の恵みを受け取ることができないという点にではなく、救いをもたらす信仰を目に見える仕方では表現できないという点にあったとしている²¹。

19 Fiddes, 'Walking Together': *The Place of Covenant Theology in Baptist Life Yesterday and Today*, 65 頁。

20 Stephen Brachlow, *The Communion of Saints: Radical Puritan and Separatist Ecclesiology, 1570-1625* (1988 年, London: Oxford University Press), p.151.

21 Ibid., p.152,153.

結 び

スマイスにとって、バプテスマとは、救いの条件ではなく、罪の赦しと魂の新生を表す保証書のような役割を果たすものだった。しかもそれは「単なる保証書」ではなく、保証する内容を表すものであり、罪の赦しと魂の新生を内的に惹き起こした「聖霊」の働きを表すという意味をもっていた。バプテスマは自らの清さや聖化の印ではなく、救い主への従順（服従）と献身の表明に他ならない。このような個人の自覚的な回心と信仰の体験が込められているゆえに、バプテスマ自体が信仰告白そのものであり、信仰の証であると捉えたのであろう。

信仰は神が人間に賜物として起こされる極めて神秘的な事柄であるので、何人も幼児（新生児）にその芽生えがないと断言することはできない。この点はスマイスも同意している。しかしながらその上でのスマイスの拘りは、「新約聖書が教える信仰と何か、それに則った聖書的な教会とはどのようなものか」にあったと考える。スマイスは、新約聖書の使信は個人に罪の悔い改めと救い主への献身を求め、その信仰の内実を形として表現することを求めていると理解して、信仰告白に基づくバプテスマの必要を説いた²²。

スマイスは、神からの一方的な恵みの賜物として信仰が個人の内に芽生えるゆえに、それを可視的にあらわすバプテスマの必要を説く。これに関しては後年、ジェネラル・バプテストとパティキュラー・バプテストの間で議論が起こることになった。前者は新生が先行して、悔い改めと信仰が芽生えると言い、後者は恵みが先行が、魂の新生を起こし、悔い改めへと導くというように、異なる強調点をもって持論を展開した。しかしながら両者とも、先行する事柄としての神による内的な出来事があり、それを信仰告白によっ

22 本文で既に紹介した箇所と重複するものもあるが、スマイス自身が論拠となる聖書箇所を以下にあげておく。罪人の告白（マタイ 3・6）、罪の告白とバプテスマによる救い（マタイ 7-12、ルカ 7・29-30）、信じる人々とバプテスマの関係（使徒 8・12, 13, 36-38, 10・46）、悔い改めとバプテスマの関係（使徒 2・38）、教えられることによってキリストの弟子となる（マタイ 28・19, ヨハネ 4・1）、信仰と新生した者（ヨハネ 3・3）など。

て表明し、続いて水による洗いが行われるのが新約聖書の教えるバプテスマであるという理解では一致を見た。そうであれば、幼児（新生児）には、幼児（新生児）であるがゆえに、新約聖書が教えるバプテスマを施すことはできない。この点を曖昧にすれば、バプテスマの形式化・空洞化をもたらすとしてクリフトンに代表される分離派を批判したスマイスの主張は、英語圏最初のバプテスト教会を創立したトマス・ヘルウィス (Thomas Helwys, c.1575-c.1616) が、17世紀のヨーロッパで最初に政教分離と信教の自由の擁護を唱えたといわれる論文 *A Short Declaration of the Mystery of Iniquity* (1612年) に受け継がれている。イングランド・バプテストの神学者ホイーラー・ロンビンソンは、「教会とは何かという理解によって、バプテストは立ちも倒れもする」と述べた²³。これは、とりも直さず、バプテストとしての信仰理解と教会理解は、バプテスマ理解にかかっているということを暗示しているであろう。

引用文献

- Stephen Brachlow, *The Communion of Saints : Radical Puritan and Separatist Ecclesiology, 1570-1625* (London : Oxford University Press, 1988)
- Paul S. Fiddes, 'Walking Together : *The Place of Covenant Theology in Baptist Life Yesterday and Today*' in *Pilgrim Pathways* (Macon, GA : Mercer University Press, 1996)
- Benjamin Keach, *The Display of Glorious Grace, or The Covenant of Peace Opened. In Fourteen Sermons* (London, 1698) by University Microfilms International (Ann Arbor, Michigan, 1983)
- H. Wheeler Robinson, 'The Life and Faith of the Baptists' (1927) in Anthony Cross, *Baptism and the Baptists* (London : Paternoster Press, 2000)
- 齊藤剛毅, 『バプテスト教会の起源と問題』(1996年, ヨルダン社)
- John Smyth, 'The Character of the Beast', *The Works of John Smyth*, vol.2 (Reprinted by The Baptist Standard Bearer, 2009)
- W.T. Whitely, ed., *The Works of John Smyth*, Vol.1, (rep, by the Baptist Standard Bearer, 2009).

23 Robinson, 'The Life and Faith of the Baptists' , 84 quoted in Cross, *Baptism and the Baptists*, p.29-30.